

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

§ 070 マタ 10 : 34～11 : 1

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの公生涯は、弟子訓練の段階に入っている。
- ②3度目のガリラヤ伝道では、弟子たちを2人一組にして、派遣している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「3度目のガリラヤ伝道」 (§ 70)

マタ 9 : 35～11 : 1

(3) この箇所を7分割して学ぶ。

- ①使徒たちを派遣する必要性 (9 : 35～10 : 4)
- ②使徒たちへの具体的指示 (10 : 5～15)
- ③迫害への警告 (10 : 16～23)
- ④拒否への警告 (10 : 24～33)
- ⑤拒否の結果 (10 : 34～39)
- ⑥信じる者への報い (10 : 40～42)
- ⑦結語 (11 : 1)

2. アウトライン

(5) 拒否の結果 (10 : 34～39)

- ①ユダヤ人の時代認識とイエスの時代認識
- ②家族の敵対関係
- ③十字架の道

(6) 信じる者への報い (10 : 40～42)

- ①代理人のユダヤ的概念
- ②預言者のユダヤ的概念
- ③報酬のユダヤ的概念

(7) 結語 (11 : 1)

3. 結論 :

- (1) イエスはなぜ、献身的な愛を要求することができたのか。
- (2) 預言者を受け入れるとは、今の私たちにとってどういう意味があるのか。

## 12 使徒の派遣について学ぶ。

### I. 拒否の結果 (10 : 34~39)

#### 1. ユダヤ人の時代認識とイエスの時代認識

##### (1) 通常ユダヤ人たちの時代認識

- ① 終わりの時代には患難がやって来る。
- ② その最後にメシアが登場し、イスラエルの民に勝利をもたらす。
- ③ その後、平和な時代が訪れる (メシア的王国への期待)。

##### (2) イエスの時代認識

- ① ユダヤ人の指導者たちはイエスのメシア性を拒否した。
- ② それゆえ、メシアによる平和はまだ先のことになった。
- ③ イエスの弟子たる者は、迫害や患難に備える必要がある。
- ④ 救いは恵みによるが、弟子としての歩みには犠牲が伴う。

#### 2. 家族の敵対関係 (34~37 節)

##### (1) 34 節

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです」

- ① イエスは、地に平和をもたらすために来られた。
- ② エペ 2 : 14~17

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました」

- ③ ヨハ 3 : 17

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである」

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

- ④もしユダヤ人たちがイエスを受け入れていたなら、平和が来ていた。
- ⑤しかし彼らはイエスを拒否したので、剣をもたらすような結果になった。

(2)35～36節

「なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります」

- ①ミカ7:6の引用である。
  - \*ミカの時代の状況の描写である。
  - \*彼は、救いをもたらす【主】への信頼を告白している。
- ②父が信者になると、息子が反対する。
- ③母が信者になると、娘が反対する。
- ④しゅうとめが信者になると、嫁が反対する。
- ⑤信者にとっては、家族が最も手ごわい敵となる。

(3)37節

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」

- ①弟子は、イエスを選ぶか、家族を選ぶかの二者択一を迫られる。
- ②弟子は、愛の優先順位をはっきりさせる必要がある。

3. 十字架の道(38～39節)

(1)38節

「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」

- ①十字架刑は、公衆の面前で行われる「見せしめの刑」、「辱めの刑」である。
- ②罪人は、十字架の横木を負って町の真ん中を進んで行った。
- ③そのように、イエスの弟子は、イエスこそメシアであることを公の場で宣言する。いかなる辱めを受けても、それを行う。

(2)39節

「自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします」

- ①ここでは、家族以上に大事にしている「自分のいのち」が問題とされる。
- ②それさえも、愛の優先順位からすると、一番ではない。
- ③この逆説的真理は、終末的真理である。

④と同時に、現在が適用可能な真理でもある。

## II. 信じる者への報い(10:40~42)

### 1. 代理人のユダヤ的概念(40節)

「あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです」

(1)代理人は、遣わした主人の権威を帯びて派遣される。

①代理人を受け入れることは、主人を受け入れることである。

(2)父なる神→イエス→使徒たち

①使徒たちを受け入れることは、イエスを受け入れることである。

②イエスを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

③ゆえに、使徒たちを受け入れることは、父なる神を受け入れることである。

### 2. 預言者のユダヤ的概念(41節)

「預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます」

(1)旧約聖書の3大職責

①王

②祭司

③預言者

(2)ユダヤ人たちは、預言者が受ける報いが一番大きいと考えていた。

①預言者は、王と祭司に向かって神のことばを教える。

(3)ここでは、弟子たちは「預言者」や「義人」と呼ばれている。

①預言者を受け入れる者は、預言者の受ける報いを受ける。

②義人を受け入れる者は、義人の受ける報いを受ける。

### 3. 報酬のユダヤ的概念(42節)

「わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません」

(1)ユダヤ人たちは、今の世と次の世とを対比させる考え方をしていた。

「3度目のガリラヤ伝道(3)」

- ①今の世で行う善行は、次の世での報いをもたらす。
- ②イエスのこのことばは、地上的な適用を持っている。

(2) 「この小さい者たち」

- ①文脈では、イエスの弟子たちである。
- ②福音を宣べ伝える者たちである。

(3) 「水一杯でも飲ませるなら」

- ①貧しい人たちは、それしかできない。
- ②しかし、これで十分であるし、これこそ必要不可欠なものである。

### Ⅲ. 結語 (11:1)

「イエスはこのように十二弟子に注意を与え、それを終えられると、彼らの町々で教えたり宣べ伝えたりするため、そこを立ち去られた」

(1) 弟子たちはガリラヤ各地に派遣されたと考えるべきである。

- ①弟子たちは、イエスの権威を帯びて、出て行った。
- ②教え、癒し、福音を宣べ伝えた。

(2) イエス自身も、宣教に立たれた。

- ①「彼らの町々」とは、弟子たちの故郷であろう。

(3) この時から、信じるとは「個人の決断」、「個人の責任」となった。

### 結論：

1. イエスはなぜ、献身的な愛を要求することができたのか。

(1) ルカ 14:26

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」

- ①家族を憎むのは、律法違反である。
- ②ユダヤ文化では、家族の絆は非常に固い。
- ③「憎む」とは、愛の優先順位を強調するための言葉である。
- ④イエスへの愛を第一にすることである。
- ⑤事実、家族の懇願を振り切ってイエスに献身する者は、家族を憎んでいるかの

ように見える。

(2) 申6:4~5

「聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい」

- ①イエスは、弟子たちにこのことを要求されたのである。
- ②この要求は、イエスの神性宣言である。

2. 預言者を受け入れるとは、今の私たちにとってどういう意味があるのか。

(1) マタ10:41

「預言者を預言者だということで受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます」

- ①弟子たちを受け入れた者は、イエスがメシアであることを信じた者である。
  - ②弟子たちは、お礼返しの心配をする必要はない。
  - ③イエス自身が彼らに報酬を与えてくださる。
- (例話) 献金を呼びかけることへの躊躇

(2) 伝道者の心構え

- ①自分は神のことばを正しく伝えているだろうか、自問自答する。
- ②それができたなら、支援を受けることに抵抗感を覚える必要はない。
- ③なぜなら、神がその人に報酬を与えてくださるから。

(3) 支援者の心構え

- ①その人が神のことばを語っているかどうかを、吟味する。
- ②もし語っているなら、その人の働きを妨害するのは、神に敵対する行為である。
- ③そのような人を支援するなら、その人が受ける報いが、自分にも与えられる。
- ④「水一杯でも」大いに有効である。